

# 美術館探訪

## 東京都美術館「木々との対話」展

東京都美術館の開館90周年の記念展として2016年7月26日から10月2日まで催された「木々との対話・再生を巡る5つの風景」は、彫刻を中心とした特別展でした。この記念展では、日本で活躍する5人の現代彫刻作家を取り上げており、作品を活かした展示と多くのワークショップやトークギャラリーを同時に開催していました。東京都美術館は1926年に東京府美術館として開館されました。当時は、日本で初めての公立美術館として話題を集めたそうです。旧館から新館生まれ変わる段階で、東京都美術館と改称。現在は近現代美術を中心に、年間バラエティーに富んだ企画展を催しています。2016年春に開

催された若冲展に多くの来場者が殺到したのは、記憶に新しいのではないのでしょうか。

今回の記念展で印象的だったのは、土屋仁応氏の素材で精巧な彫刻と須田悦弘氏の精緻な植物でした。土屋氏は、主にさまざまな動物を仏像彫刻や独自の彩色技法を駆使して、作品を創り出す若手の木彫り作家です。

展示スペースでは、主に動物の彫刻が展示されていて、中には龍やユニコーンなどの架空動物の彫刻も紹介されていました。どの作品も木の質感を活かした淡い彩色が施されていて、温かみのある雰囲気をもとっていました。また、多くの作品には、水晶やガラスなどで作られた玉眼がはめ込まれており、いまにも動きだしそうです。滑らかな木地に彫られた模様や鱗・毛並みの技巧も繊細

で、作品の多くに華奢で儂い、幻想的な印象を受けます。

須田氏は、本物をそのまま写し取ったかのようにリアルな彫刻を生み出す彫刻作家です。作品を展示する空間にも配慮した作品作りを得意としています。(今回の記念展では、壁面から百合を覗かせ、雑草を天井屋根に活けるなどの展示方法)こちらは、展示室とともにワークショップにも参加することができました。ワークショップは6日間限定で設けられていた木々のアトリエにて、須田氏自らが作品を公開制作する様子を見学することができました。(スペースの一角にいくつか椅子が置かれており、出入り自由の比較の見学しやすい公開制作でした)

須田氏が質問に答えながら、作品がだんだんと

完成に近づく様子に見学者全員が目奪われていました。途中からの参加でしたが、作品の成型から彩色段階までを見ることができ、彩色前には実際に作品に触れる貴重な体験をさせていただきました。実際に触ってみると、実物の葉と同じく、薄い薄さまで木を削り取っていて、葉脈や虫喰いをとても細かく再現している反面、紛れも無く木を彫ったものだと強く感じることもでき、不思議な印象を受けました。

いままで博物館で出会う彫刻といえば仏像がほとんどだった私にとって、この記念展はとも新鮮味があり、興味深い体験が出来ました。木の香りに包まれながらの公開制作も印象深く、彫刻の印象ががらりと変わった記念展でした。

### 森美術館

#### 『ルーヴル美術館特別「ルーヴルN.O.9」』

2016年7月22日から9月25日までルーヴル美術館特別展として開催された「ルーヴルN.O.9」では、世界的にも稀な漫画（バンド・デシネ）を題材とした特別展です。この特別展には、日本人のアーティストを含め16人の世界で活躍する漫画家たちの作品が一堂に会し、作品全てがルーヴル美術館をテーマとしており、展示方法も彼らの感性を体感できるような工夫が凝らされています。

した。

まず、最初の部屋は、各アーティストの説明が。その後、時間をおいて次の部屋へ通されます。ここでは、ルーヴル美術館と今企画展についての短いムービーを観賞します。ビデオが終わるとともに、いよいよ作品の待つ展示室へ。展示室は作品の個性ごとに分布されていて、あたかも自分が作品の中に入り込んだかのような楽しい錯覚を感じることが出来ます。シンプルな展示室から、額縁だらけのモノクロの部屋、絵画を飾った黒い部屋、ダイナミックに一枚絵を壁一面に張った部屋、赤い壁の細長い部屋、真っ白な部屋、そして海の景色が揺れる部屋……。

生き生きとしたもの、静かなもの、ウィットに富んだもの、収蔵作品への畏敬など、同じテーマから描かれた異なる個性を放つ物語は、どれも圧倒されるものばかりでした。特にダヴィッド・ブリュム氏の「ルーヴル横断」は、台詞が少なく、漫画を読んでいるというよりも大小さまざまな静止画を連続して観ているようで、とても幻想的な印象を受けました。また視点の映り方が独特で、クスリと笑ってしまったり、思わず圧倒されるようなコマがいくつもありました。

また、坂本眞一氏の「王妃アントワネット、モナリザに逢う」は、コマ割りや画風、ストーリーの展開などが馴染みやすく、流れるように読み進

めることが出来ました。加えて、一部の描写に資料の上から赤い塗料を飛ばしてあり（恐らく展示室に設置後）、普段読む漫画では表現できない、この展示会ならではの工夫と効果的な展示方法に驚きました。

個性的な展示室や展示方法のみならず、「ルーヴルN.O.9」のテーマ曲（音声ガイドにて視聴可）との調和も相まって、展示の終盤に差し掛かるころには、序盤のトリッキーな雰囲気とは異なる、軽やかな雰囲気で見ることが出来ました。

今回「ルーヴルN.O.9」を通して、自分の中の漫画に対する印象が少し変化したように感じました。そして我々が普段、娯楽として読んでいる漫画を芸術という観点から見ること、漫画（バンド・デシネ）のさらなる魅力を見つけることが出来たように感じます。今後、漫画という文化に対して私たちも新たな認識を持つことが必要なのではないでしょうか。